

■総評

福岡学生演劇祭は初期の頃、第4回くらいまでは観劇に行っていた記憶があります。どんな芝居が行われていたか詳細には覚えていませんが、僕の印象は「まあ、学生演劇だな」といったものでした。

……なんかいけ好かない言い方ですね（笑）

すみません。十年近く前のことなので、ご容赦ください。当時の僕は尖っていたかったです。

客席で足を組んでナナメから見ていた視野の狭い僕のせいもあるかと思いますが、その頃の芝居は「学生演劇」という枠組みに回収されていたような印象がありました。特に演技の方向性が似ていた印象です。

ですが、今回、久しぶりに観た学生さんたちの芝居はバラエティに富んでいて楽しめました。台本を読んだ時から「お、こんなにいろんな方向性があるのか」と感銘を受けたのですが、上演を観てなおさら感じました。特に演技の方向性が、自分たちがやろうとしている作品にふさわしいものをチョイスしているように見えたので、皆さん、よく考えられているなあと感心したものです。

これだけ多様なものが生まれているのは、もちろん出場団体の皆さんの努力の成果でもあるでしょうが、福岡学生演劇祭が積み重ねてきた歴史の成果なのかな、とも思います。どうぞ、今後も継続していただき、福岡の演劇を盛り上げていってください。そして今回出場した皆さんも、いろんな形で演劇に関わっていってくれと、福岡の演劇人として大変うれしく思います。

と、基本的には非常に好意的に、そしてワクワクしながら観ていたのですが、「ここはもうちょっとこうした方がいいんじゃないだろうか」など、いくつか思う点があるので記していこうと思います。

その前に、僕の立場を明確にしておきます。僕は日常を題材にしたウェルメイドな会話劇を作っています。そして、演出もするし俳優もしますが、どれかひとつと言われたら作家を選ぶくらい、作家への思いが強い人間です。

どうしたって自分の観点でしかものを言うことはできません。ですので、「こいつはなんか違うな」と思ったら、どうぞスルーしてください。僕も若かりし頃、あっちこっちの人からいろんなことを言われて、何が正解なのかわからず苦しんだことがあります。けれど、演劇に正解はありません。みんな自分の演劇観で好き勝手言うだけで、どれが正しいというわけではないのです。

さて、前置きが長くなってしまいましたが、全体を通して「表現者側の都合を優先した、都合のよい選択をしてしまっていないか」というところが、最も大きく感じた点でした。

たとえば、場面転換をするのに暗転という便利な方法がありますよね。映像のように簡単に時間や場所を切り替えられない演劇は場面転換に苦勞してしましますが、暗転をすれば比較的簡単に転換できます。ですが、表現者側にとって便利でも、観客にとってはせっかく

高まった劇的な緊張感が途切れ、ただ待つことを強いられる時間になってしまうこともあります。

マイムで小道具を表現するのもそうです。実際に小道具を用意するのは手間も予算もかかるし、舞台上に出せばハケの処理も考えなくてははいけません。だから「じゃ、マイムで済ませよう」と消去法的に選んでしまいがちです。

大切なのは「考える」ことだと思います。予算もない、用意する時間もない、技術もないから「これでいいや」ではなく、そこで「本当に無理なのか」を考える。別の表現方法はないか、そもそもその小道具は台本上本当に必要なのか、台本から疑ってみる。この格闘の跡が見られる芝居はぐっと密度が高くなる。安易な妥協に逃げず、不自由さと格闘するということが大切じゃないかと僕は考えています。

台本においても、やはり「作者にとって都合のいい展開で解決してしまっている」ものはいくつか見受けられたのが、少しもったいないなと感じました。

今回は場面が激しく転換していく作品が多かった印象です。

もちろん、場面転換する作品がダメだと言っているわけではありません。ただ、「都合のいい場面転換になっていないか」ということです。展開に困ったときに場面を変えるのは手取り早く、そして強力な誘惑ですから（笑）

でも、そうやって都合よく書いていくと、ストーリーは追えても「芝居」にはなりにくい。ストーリーはあくまで表面的な筋であって、その中で人間がどう生き、どう変化していくか、というのが芝居の面白さだと思うからです。

だからこそ「ああ、そこ、もう一步踏み込んで粘ってほしい」「場所を変えずに粘れば、もっとキャラクターの違った顔が見えるはずなのに」と思うことがままありました。

僕はワンシチュエーション教の信者なので（笑）、皆さんも一度、ワンシチュエーションの作品を書いてみることをおすすめします。場所が動かない。人物の出入りと会話だけで展開させなければならぬ。そんな不自由さの中で書いてみると、台本を面白くするためには考え抜かなければいけないということが、身にしみて見えてくるかと思います。

その経験を経て自由に書くのと、気づかないうちに都合よく書いてしまっているのでは、全然違ってくるのではないのでしょうか。

では、個別の講評に移っていきますね。

■きみどなり『pictured』

ワンシチュエーションの会話劇！僕の作っている演劇と方向性は近いので、好意的に見すぎてしまっている、というのはあるかなと思います。そこは差し引いてください。

台本の完成度は高いです。

一点気になるのは、しばしばアルバムを見返していた藍子がなぜ今まで美鶴が付箋に書いている姿に気づかなかったのか、というところです。おそらく後ろ姿でごく小さく映っているからよほど注意しないと見つけれない、ということなのでしょう。そしてこの夜の美

鶴の不審な行動がきっかけとなって発見するに至ったと考えれば不自然ではありません。

とはいえ、あれほど美鶴のことが好きな藍子は、どんな小さな美鶴も見逃さないぞとこれまでもくまなく探さなかったのでしょうか？あれほど執着しているのだから、という気もしますが、執着しているのは思い出の中の美鶴であって現実（写真）に映っている美鶴ではない、だからつぶさには見ていなかったとも考えられるので、僕の指摘は致命的な弱点というわけではありません。ただ、若干引っかかりました。

演技、演出面で一点。藍子役の造形がデフォルメしすぎなのかな？と思いました。言葉を選ばずに言えば、藍子が「気持ち悪い人」という一面的な見え方に寄りすぎてしまったように感じました。もう少しわかりやすく言うと、藍子が悪で美鶴は善、みたいな感じにも見えて、それはこの作品の意図するところではないのではないのでしょうか。美鶴も言ってしまうと褒められたような人間ではないわけで、どちらが正しいというわけではないですね。そのあたりのバランスは慎重に見ていった方がよかったんじゃないのかな、と思いました。

■福岡教育大学演劇部『灰、よろこんで』

まずは台本ですが、冒頭の状況説明が少し長かったです。

前振りを観客と共有することは大切ですが、前振りばかりが続くと「で、本題は？」となるのは日常のコミュニケーションでも同じことですよね。全16ページ中、最初の約4.5ページを「真白がいかに色々な人からお願いされそれを引き受けているか」ということを同じパターンで描いているので、もっとコンパクトでいいかと思いました。カイという抽象的な存在が出てくる、抽象劇であるわけですから、冒頭も抽象的にスタートすれば圧縮できたのではないかと思います。

たとえばセンターに真白がいて、背後にずらりと登場人物たちがいる。登場人物たちは矢継ぎ早に真白へお願いを浴びせ、真白は「はい、よろこんで！」と四方八方に答える。ポップな音楽に乗せ、テンポよくコミカルに進めるような抽象的、象徴的なシーンでスタートすれば1.5ページくらいに圧縮できますし、真白が常にまわりから要求され、息が詰まりそうになっているという心理的な圧迫もすばやく観客に体感させることができます。

冒頭を圧縮できれば、その後のページで描けることが多くなります。カイや彩花との葛藤をもっと描ければよりドラマが膨らむのではないのでしょうか。

演技と演出面ですが、カイの身振り手振りが多かったのはやや説明的・記号的だなと感じました。他のキャラクターたちもその傾向が強かったように思います。また、せっかくの大道具でしたが、カイの登場の際に一度暗転を挟むというのはもったいなかったですね。パーンと扉が開いて登場してくれた方が観客は楽しめたのではないのでしょうか。

■SECOND Bell『先生！トイレ』

バカバカしい（褒め言葉ですよ！）コメディ作品でした。

台本を読んだ時に、やりたいことは伝わってきましたが、正直僕の好みではありませんで

した。僕は「うまいなあ」と唸られる、技巧派の笑いが好きなので。

この作品の笑いの基本は、たとえば「先生用のほうき」を最強の武器として扱ったり、そのほうきを誰が使うかで延々と争ったりと、くだらないことを大真面目にやる、ということですよ。台本を読んでいる時には、その構造がわりと早い段階で見えてしまったので、僕には少し単調にも感じられました。

しかし、上演を見るととても楽しめました。文字で読めばただの「先生用のほうき」でも、役者たちが命懸けの最強武器として扱えば、それだけでおかしい。そう考えると、この作品は台本だけで笑わせるというより、役者の身体や間、勢いまで含めて完成するタイプの作品なのかもしれません。そして役者の皆さんたちがいかに魅力的であったかということでもありますよね。

こういうタイプの作品は役者が全力でバカをやらないと成立しません。それを見事に成立させていたからこそ観客賞だったのでしょうし、素直に拍手を送りたいと思います。やや滑舌が悪い方がいたり、微妙なリズムやテンポのズレなどもう少し稽古を重ねていたら……と思うところもありましたが、それでもあの成果を出せたのはみなさんのパワーが勝ったということでしょう。

ただ、パワー押しだからこそ滑舌が悪いとも言えるかと思います。滑舌が悪かった方は、終演後におしゃべりした際は滑舌が悪くなかったですし、きっと普段はそうでもないはずですよ？ではなぜ舞台だと滑舌が悪くなったのか。舞台上で力みが生じていたことも一因ではないかと思います。全力でバカをやらないと成立しない作品でパワーを抑えるのは矛盾が生じますが、そこは訓練の賜物だと思います。心は熱く、身体はリラックスしていないといいパフォーマンスができないのは演劇もスポーツも同じこと。演劇は文化系のものと思われがちですが、身体を伴うパフォーマンスという意味ではアスリートと同じだと思います。どんな身体が必要なのか、こういう方向の作品をやるからこそ、追求していったほうがいいです。

■gekid『リライト』

場面はたくさん変わっていきませんが、同じことが同じパターンで続いているような印象を受けました。

主人公が「うまくいっていない人間」であることは2ページくらいで伝わるのですが、その先もずっとダメなところを見せていきますよね。僕が観客として次に見たくなかったのは、彼が何をきっかけにどう変わっていくか、ということでした。その話の芯となるべきところがなかなか見えてこない。そうすると「一体、何の話？」となってしまいますよね。

漫画の世界と現実（本当は主人公の脳内の世界ですが、便宜的に現実にしておきますね）の世界とをテンポよく切り替えることで観客を飽きさせないようにしようと考えたのかな、と思いますが、芯となるべき「問題」が見えてこない、とどんなに個々のシーンが魅力的でも僕は物語にはのめり込みにくくなってしまいます。

そして先ほど「現実の世界」と書きましたが、この作品は結局、主人公の頭の中での話ですよね。登場人物たちは彼の自己嫌悪や不安、現実逃避したい精神の擬人化なわけですが、それだけだと「部屋に閉じこもった若者が一人で悩んで一人で納得してまた創作を始める」という話になってしまって、僕としては「観客を巻き込む劇的な葛藤」としては少し物足りなさを感じてしまいました。

たとえば彼女、友人、親など外部からのプレッシャーがあって頑張らなければいけない、でも苦しい。でもこのままではいけない……という展開の方が僕は感情移入しやすかったかもしれません。

演技と演出面で少しだけ。ファンタジーのシーンはもっと遊べたと思いました。せっかくの非日常のシーンなのに、身体が日常的なままだとチグハグになってしまいますよね。どっぷり非日常に浸かった方がよかったかと思います。

■九州産業大学劇団テスカトル『ちょこらーじゅ』

ナンセンスコメディですが、集団と個人を描いている作品で、バカ（褒め言葉です！）なフリして実は深くも読めるという才気を感じる作品でした。ただ一点、もったいないと感じたところがあります。

ナナは「私はあなたたちとは違うんです」と馴染めない自分を馴染めないまま肯定しようとするタイプかなと思います。だから宇宙人とか言っちゃう。でも、本当は人と繋がりたい。だからこそ、本当に宇宙人のフォと惹かれ合う。

ここまではわかるのですが、「5.うおうさおう」の部分で「みんなに風の花嫁2の話をした」「UFO みんなも連れていっていい？」と言い出しますよね。これはなぜでしょう？本当は人と繋がりがたかったナナがフォと惹かれ合うのは自然ですが、それは「イコールみんな」になるのでしょうか？たとえば宇宙と交信するためのヘッドギアみたいなものをつけていたナナが、この場面から急にギャルみたいな格好になっているとか、何かしらの変化があれば「ああ、結局あの子はみんなに馴染みたかったんだな」となるけれど、台本上でも上演時もそういう変化はありませんでした。フォは変化していましたけどね。であるなら、なぜみんなに馴染め合う気のなかったナナはみんなに迎合しようとしたのでしょうか？ここが腑に落ちなかったです。

「孤立していたナナがフォと惹かれ合ったことでみんなにも近づき、結果みんなという集団の中で身動きが取れなくなる」という構図はとても皮肉が効いていて面白いのですが、上記の点でうまく「橋渡し」ができていなかったのかな、と思いました。

■ぱっとでごー『観覧車の下で会いましょう』

台本を読んだ時に別役さんが好きなんだろうなと思っていて、楽しみにしていました。結果から言うと、ごめんなさい、台本を読んだ時の方が面白いと思ってしまいました。

役者の二人はとても頑張っていたと思います。ですから役者が悪いというわけではない。

この作品に合う演技の方向性を演出も役者も、全員で追求してほしかったです。

「殺したって言い方、変じゃない?」「だって……なんだか可愛すぎる感じがする」「殺したってというのはどうも締まりが悪いな。品もないし」を例にとると、これをいかに普通に言えるかだと思うのです。「今日の晩ごはん何にする?」「カレーでいいんじゃない?」「昨日もカレーだったよ」「親子丼にする?」のと同じようなトーンで「いつもの夫婦の会話をしていたら、たまたま話題が殺人だった」くらいの平熱があると不条理劇として成立していくんじゃないかと思うのです。

そういう点で、全体的に少し重かったのかな、と感じました。そうすると観客は殺したということに何かとても重大な意味があるのではないかと、「意味」を追ってしまいます。意味を追い出すと途端によくわからなくなってしまう。不条理劇って「これはこういう意味なんですよ」と観客が解釈しようとするものを、するすると剥ぎ取っていくものではないかと僕は思うのです。

幕間劇が唐突に入るのも不条理劇の顔としては悪くなかったのかもしれませんが、やはりあそこに「意味」を求めてしまうような上演成果になっていた。そうすると「え? どういうこと?」で終わってしまいますよね。

不条理劇にチャレンジしたことはとても評価したいので、これを機に追求していってくれと同じ演劇人として嬉しいです。

■学生劇団「いと」～Italento～『舞台的現実感が吐き気を催させる』

哲学的で抽象的な問いにチャレンジしたのは、とても面白い試みだと思いました。これをどう表現するのかなと、台本を読んだ時点ではとても興味があったのですが、見せ方が少し素朴すぎたのかもしれない。

暗転が多かったです。僕も学生の頃(僕は高校演劇でしたが)、よく講評で「暗転が多い」と言われていましたし、「それしかねーのかよ」と毒づいていましたが(笑)、やはり暗転が多いと、「見せ方も含めて演劇だ」というところまで十分に検討されていないのかな、と感じてしまいます。場面が変わるから暗転する、という単純な発想で作っているように見えてしまう。となると、せっかく哲学的で抽象的な問いにチャレンジしているのに、表現の工夫が足りないように見えてしまうので、そこはもったいなかったですね。

また、暗転を極力減らすためには、演出上の工夫だけではなく、台本上での工夫も必要になってきます。

たとえば冒頭、男と女の「実存」を巡っての会話がありますよね。そして暗転して、男が「また同じ夢だ」となる。そして女から電話がかかってくる。ここまでが、男が稽古している「劇中劇」の世界ですよね。そのあと、男と女の日常という、もう一つの現実のシーンがある。

観客は「また同じ夢だ」という台詞によって、最初の場面が夢であり、ここからが現実なのだといったん認識する。でも、そこも実は劇中劇で、そのあとにもう一度現実(こちらが

本当の現実)が来るので、「あれ?」となる。

そうやって観客の意識をズラしていくことが目的なのかもしれませんが、僕には少しわかりにくかったです。

この作品は、不条理劇のように意味を剥ぎ取っていくのではなく、むしろ言葉で意味を突き詰めていって、その結果、混沌の世界へ連れて行くという手法なのかな、と僕は思いました。であるならば、「今はどこで何が行われているのか」という現在地については、極力わかりやすい方がいい。そのうえで様々な議論が行われ、徐々に現実と虚構の境界が曖昧になり、混沌の世界へ入っていく。その方が、この作品がやろうとしていることが、より観客に伝わったのではないかと思います。

■劇団びゃくだ『チャイムちやいむチャイム』

台本を読んだ時にテンポのいい会話とワードセンスに光るものを感じました。とはいえ、やや散漫にも感じたのは事実です。個々のエピソードは面白いけれど、ラストでそれらがひとつの絵になっていかないというか。

ですが、上演を見てとても面白かったです。役者の皆さんが魅力的でした。スピード感のある演出もよかったです。

基本的には好意的に見たので、このまま全国学生演劇祭でも頑張ってもらいたいと思いますが、この台本には可能性を感じたのでその点だけ記しておきますね。決して「こうしてほしい」ということではないのでぼんやり聞き流すくらいで結構です。

僕は台本を読んだ時にソーントン・ワイルダーの『わが町』みたいになれそうだな、と思いました。『わが町』も町の人々のありふれた日常を描きます。しかし最後にそのありふれた日常がとても愛おしいものだったと一気にひっくり返す仕掛けがあります。あっちの人、こっちの人を見ていた観客の視点を「人生全体を俯瞰する視点」に持っていくのです。たとえば、夜、遠くに立つマンションの明かりを見て「ああ、あの部屋ひとつひとつにも色々な人生があるんだな」ということを感じて、妙に人間が愛おしくなるような。

この作品も、チャイムというひとつの音をきっかけに、あっちの人生、こっちの人生を次々と覗いていきます。ですが、現状は「そこへ行ける構造は持っているのに、最後の一押しが足りない」印象です。ではどうすればいいか、そこは皆さんで考えてみてください。今のままでも十分に面白い作品なので無理にあれこれいじる必要もありません。もしかしたら何年後かにいい方法が思いつくかもしれませんし。ただ、それだけ可能性を感じた、ということはお伝えしておきたいと思います。

■北九州市立演劇研究会『(un-) 私たちに向き合った顔』

大変な野心作だなと思いました。純佳とA以外の人のセリフをスマートフォンに喋らせるというアイディアはとても示唆的で良いですね。台本を読んだ時、これはどうやるんだろうと興味津々でしたが、上演ではスタンダードで記号的な黒子がスマートフォンを持つと

いうスタイルでした。

確かに、スマートフォンは自分で移動できませんので、誰かが持って来ないと舞台に登場すらできません。ただ、個人的には登場したらあとは椅子に置いて、そのスマホと純佳が喋っているという構図の方が不気味だし、現代を切り取っているようだなと思いました。

あの記号的な黒子は、「これは見なくていい」という記号（お約束）ではあるのですが、どうしても目に入るじゃないですか。そして便利がゆえに歌舞伎から吉本新喜劇まで登場しますよね（新喜劇に黒子が登場したか正確なところは記憶していませんが、それほど多岐に渡って使われる、という意味です）。つまり、黒子が目に入った瞬間「お約束だから存在しないもの」と考えたくても余計なものまで連想してしまう。そうするとあのシーンで意図しているものとは別の見方になってしまうし、集中力が削がれてしまう。ここはもったいないなと感じました。

あと、僕はラストが描き切れていないのかな、と感じてしまいました。

この作品は同調圧力を一つのテーマとして扱っていると読んだのですが、純佳が A に対して外へ出ることを促すのもある種の同調圧力ですよ。「みんなインスタやってるよ」と言う同級生たちと「外の方が心地良いよ」と言う純佳は、実はそれほど遠くない。作者は、そこは意図的に書いていると思いました。ラスト、純佳はそのことに気づいたのか、気づいてないのか。

A とのやり取りを経て、純佳の中で何かが揺らいだことは想像できます。ただ、それを彼女がどう受け取ったのか、上演からはうまく掴むことができませんでした。

僕はこの作品では純佳を通して世界を見ていましたが、となるとラスト、純佳（観客）はどこへ連れて行かれたのでしょうか？

「結局、純佳は分かっていない。そして純佳を通して見てきたあなたも分かっていないんでしょう？あなたも純佳と同じですよ」ということを意図しているのかな？とも考えたのですが、上演時にはそこまで汲み取れず「どういうこと？」で止まってしまいました。

答えを出さないことと描かないことは違うのかな、と思います。その意味で、ラストはもう少し描く余地があったのではないかな、とも思うのです。